Story2

安楽備前守（あんらくびぜんのかみ）と島津義久の戦い

牛根城（松ヶ崎城、入船城ともいう）は、
落ち延びた平氏方が源氏方の探索に備えたのが
はじまりともいわれる山城です。
鵜岳（じゃたけ）を頂点とする鹿倉峠は、
約三百メートル離れた早崎台地を西限として
深さ七十余メートルの瀬戸海峡に落ち込んでおり、
当時の潮の流れは急流でした。
早崎台からの展望は雄大で、この城塁より監視すれば
島津方の軍船を一隻たりとも海上より見逃すことはできない、
いわば天然の要衝でした。
そのため、早崎台と入船城を智勇に優れた将が守れば
盤石であり、島津家にとっては難攻不落の地でした。

写真右：咲花平（さっかびら）　写真中央：（右）笠仏首塚、（左）六地蔵塔
写真左上：安楽備前夫婦の墓　写真左下：牛根城跡

天文十年（１５４１）頃、本田薫親（ただちか）が島津貴久から牛根を与えられ、同二十一年（１５５２）頃に肝付兼続に譲ったとされます。肝付兼続は島津氏に対する要衝の地を得たことを大変喜び、一族の智勇の将、安楽備前守兼寛をして守らせました。
永禄四年（１５６１）、薩摩・大隅・日南の三州統一を目指す島津は、島津貴久公を総大将として、肝付・伊地知・称寝連合軍との長い戦が始まりました。元亀二年（１５７１）に貴久公が亡くなり、その子義久が跡を継ぎました。
元亀三年（１５７２）には、早崎台の争奪戦が行われました。早崎台は肝付方の勇将川南安芸守が守っていました。島津歳久（義久の弟）は夜陰に乗じて瀬戸を渡り、ひそかに早崎台に迫り九月二十七日未明頂上に達して早崎の陣を襲いました。不意を突かれた城兵は慌てふためき防戦する間もなく、逃れようとしても退路を断たれて断崖を飛び降りました。その様子が、花が散るようであったといい、そこから散花平（さんかびら）と名付けられ、俗称「サッカビラ」といわれるようになったとされます。
そして天正二年（１５７４）、島津氏との激しい攻防の末、肝付氏は降伏しました。その後は島津方の伊集院魯笑斉（ろしょうさい）久道が地頭となり、牛根を治めることとなりました。安楽備前守夫婦の墓は、入船城大手の下の堀之内に残っています。島津氏と安楽備前守との長きにわたる戦は激しく、「天正二年の安楽備前守と島津義久の戦いでの戦死者の首を竿に吊るしたら、八百八竿あった」という言い伝えがあるほどでした。その霊を供養したとされるのが笠仏首塚です。安永八年（１７７９）の桜島大噴火等で埋もれてしまいましたが、畑の持ち主が耕したときに人骨がたくさん出てくるので、文政二年（１８１９）六地蔵塔を建てて戦死者の霊を供養したといわれています。